C 6　家庭科教育における「保育」領域の研究(2)ー小学校の場合ー

東京家政大家政　○川合貞子　上越教育大　大瀧ミドリ
都立久留米高　桑名有米子　宇都宮大教育　金崎芙美子

目的　小学校家庭科では、家庭科の中心課題である人間自身の問題を直接学習する領域としての「家族」領域が、43年の指導要領では四領域（被服、食物、すまい、家庭）の一つとして独立していたが、52年の教育課程の改訂においては「すまい」と「家庭」が「住居と家族」と一領域にまとめられた。家庭を基礎とした、より有機的、総合的な指導を目ざし、実践的、体験的な学習を特質とする家庭科という観点に立っての改訂である。しかし、全体的にみて、ものを作るという実践的学習が優位で、人間そのものを対象とした学習が少ないという印象を受ける。本報告では、家庭科の中心課題はあくまでも人間自身を主軸と考えて、「育ち合い」という視点から現在教科書として用いられているものを分析する。

結果　(1)家族相互の理解を深め、協力する態度を養うために、仕事、役割、生活時間調べが設定されているが、このような形式的、形態的側面で家族理解が深められるであろうか。親も子も感情の触れ合う中で成長してゆく側面に焦点を当てるンとンそ、人間的発達の面における家庭や家族の意味があり、そこに共に育ち合う基礎がある。(2)家庭を社会から分離しすぎてはいないか。社会と家庭の関連が明確にされる必要がある。(3)全ての領域の基礎として、「家庭」は各領域に統合されているが、作るという面が強調され、「家庭」は単にことばのレベルに止っているのではないか。(4)社会において、家庭や家族の持つ意味が急激に変化し、その中に取り込まれている子どもの意識も又変化しているのではなかろうか。家庭を「明るい」「楽しい」と理想的に強調しすぎてはいないだろうか。